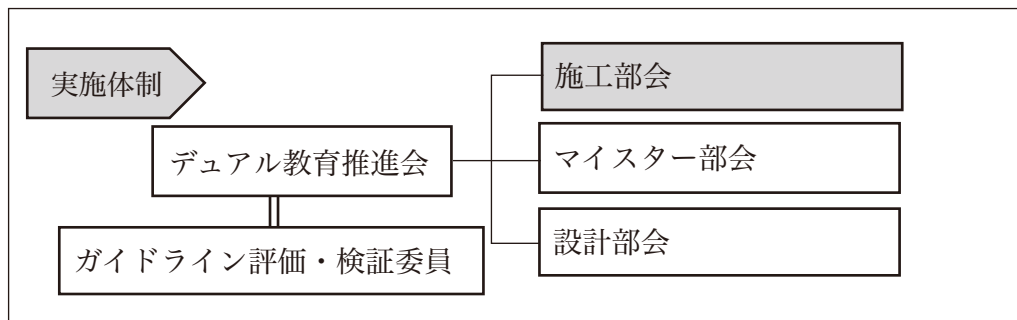


意義と課題の抽出

産官学連携の企業内実習を全国の専修学校向けに全国版スタンダードなガイドラインを作成することにおいて、意義と課題について以下の実施体制の下、議論を重ねた。

(1) 施工部会における意義と課題の抽出

■ 施工部会実施体制図



① 企業内実習の意義

【学校・学生側】

- ・現場の「生」の姿を知る機会となり、就職の際のミスマッチが解消できる。
- ・現場に出ると自分のやりたいことと実際との違いを知ることができる。
- ・技術力(職人の技を見て実感)・コミュニケーション能力等が養われる。
- ・仕事の嫌な面を事前に知る事ができる(例:職人との給与面の違い等)。

【企業・業界団体側】

- ・人材不足の中、就職へつなげる機会となる(人材確保のため)。
- ・学生の態度・能力を見極めることができる。
- ・経験の少ない指導担当者(社会人4～5年生)のよい勉強の機会となる。

② 企業内実習の課題

【学校・学生側】

- ・安全に関する指導をしても、認識まで高まらない(安全についてしっかりと自覚しないと現場での足手まといになる)。
- ・企業側の学生評価をどのようにするか。(担当者で意見交換、職長の指導、アンケート等)
- ・傷害保険への加入等の事故対応を明確にする。

【企業・業界団体側】

- ・企業のトップに理解がないと実習受入れは難しい。

- ・受入体制が整っていない企業では、効果的な実習は難しい。
- ・入社が内定した学生でないと、長期に毎日の実習を受け入れることは難しい。
- ・施工会社が魅力的に見えるような現場の継続的な提供を工夫する。

③ 企業内実習のあり方

【適切な実習期間の設定】

- ・地べた周りから内装まで一連の流れを体験するには4ヶ月間、週1回の現場実習が必要。
- ・1～2ヶ月間、ぶっ通しは、職人の場合はよいが、監督業は行程の進捗が分かりにくいし、一通り覚えるには個人差もあるが、1～3年掛かるため現実的ではない。

【適切な十種現場の設定】

- ・興味・関心を喚起する現場を選定する必要がある(工期が厳しい・人数が少ない現場は見送る)。
- ・行程の進捗を見ながら、タイミングよく実習を開始する。
- ・プロを目指す学生に、見学会的な実習はよくない。

④ 安全整理のあり方

【学校・学生側】

- ・学校では、実習を行う前に、参加学生に対して90分1コマの安全教育を行っている(服装や態度、危険回避等)。
- ・安全に関することは、繰り返し指導しないと行動に結びつかない。
- ・まず、大きな声で挨拶をすることが基本である。
- ・体調を万全にして来ない学生がいる

【企業・業界団体側】

- ・一番多い事故は物的要因ではなく、人的要因である(ヒューマンエラー)。
- ・職員の特性を把握し、資質向上に努めている。
- ・危険予知(KY)活動から、危険源を見つけ提言するリスクアセスメントへと取組を転換し、毎朝、朝礼後、実施している。



今後の指導の工夫

- ・書店にある「新入社員テキスト」等を参考にし、安全に関するマニュアルやチェックシートを作成するとともに、事故が起きた場合の行動マニュアルも作成する。
- ・作成したマニュアルをもとに学校で指導し、自覚・認識しているか企業内実習(企業内実習)で検証する。

⑤ 評価のあり方

【学校側の意見】

- ・ 学校で評価したものを企業側へフィードバックし、企業目で評価することが必要である。
- ・ 企業評価は、学生に企業側が自分をどう見ているかを意識させるためにも進めたい。

【企業側の意見】

- ・ 学生の動きだけを見て評価するのは難しい。
- ・ 評価する手間の問題ではなく、評価する基準の難しさの問題である。
- ・ 仕事に対する姿勢などの簡単なチェックシートがあれば評価できる。

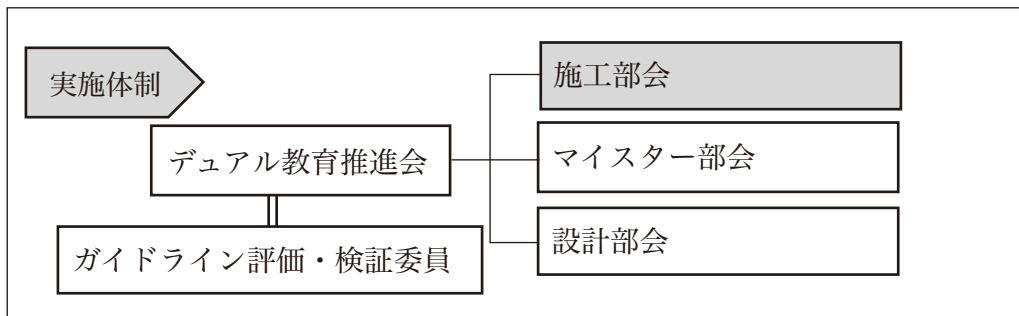


今後の指導の工夫

- ・ 企業と学校が合致した評価方法・評価内容を検討していく。
- ・ 企業評価チェックシートを作成し、企業目線の学生評価を進める。
- ・ 日報を安全と品質に分けて記述させ、学校だけでなく企業側もコメントを書くことも検討する。

(2) マイスター部会における意義と課題

■ マイスター部会実施体制図



① 企業内実習の意義

【学校・学生側】

- ・ 仕事ができないことを実感する。
- ・ 自分の志望と実際の職場とのギャップに気づく。
- ・ 職人技術で飯が食えるという間違いに気づく。
- ・ 学校(授業)と社会(現場)の違いを知る。

【企業・団体側】

- ・ 現場の雰囲気を感じてもらう。
- ・ 現場の実際を知る。

- ・職人が何を考えて仕事をしているか学ぶ。
- ・現場の流れを理解する。
- ・他人との関係(ネットワーク)の必要性を知る。



今後の指導の工夫

■長期の企業内実習であれば効果が期待できる。

- ・長期間の夏休みの現場でのアルバイトが一番、身になっている。2～3日の実習は仕事体験レベルになってしまう。
- ・学校ではどうしても甘えが出てしまう(緊張感の持続性がない)。

② 企業内実習の課題

【学校・学生側】

- ・社会生活上のマナーやルールを守る指導を徹底する(特に挨拶、遅刻等)。
- ・やる気、一所懸命さ、集中力等を重点的に指導する。
- ・授業時間で終わる指導から、課題解決で終わる指導へ。
- ・現場のルール、安全衛生法違反などについて、企業・学校が協力して指導する。
- ・長期企業内実習と単位認定、授業との関係を整理する。

【企業・業界団体側】

- ・受入現場があるか。
- ・2人の現場では学生指導が難しい。
- ・職種による長期企業内実習のあり方を整理する(一時期集中か年間定期的等)。
- ・職種による無償・有償を整理する。
- ・傷害保険加入方法を整理する。
- ・事故時の責任の所在を明確にする協定書等を検討する。

③ 学生の実習中の事故等への対応方法(主に保険等)

【学校・学生側と企業・業界団体側との共通認識】

- ・学校が現在加入している企業内実習活動賠償保険、学生災害傷害保険で対応する。

④ 企業内実習の期間と実施時期・受入れ方法と課題

【学校・学生側と企業・業界団体側の共通認識】

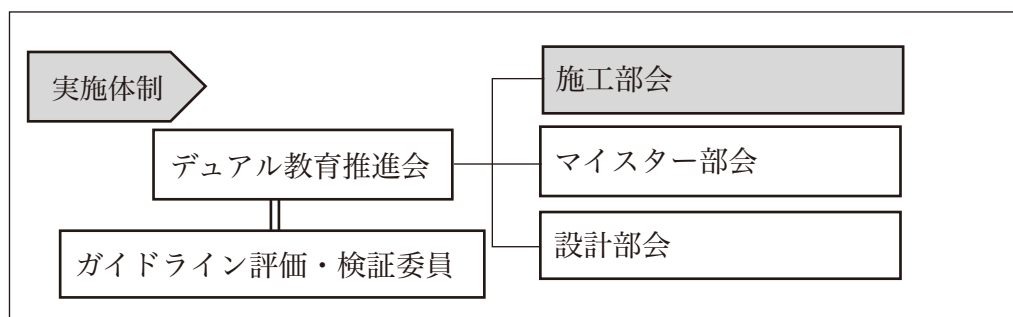
- ・実施期間:長期間として1ヶ月程度、もしくはそれ以上。
- ・実施時期:3級の技能試験が終わる7月以降(8月から)、2級の技能検定が終わる1月以降、一定水準以上の学習を行った後の2年の10月頃。
- ・受入れ方法:他の職種と違い、大工・左官は無償を原則とする。

【課題】

- ・学校のカリキュラムとの関係から適切な実施時期を選定する。

(3) 設計部会における意義と課題

■設計部会実施体制図



① 企業内実習の意義

【学校・学生側】

- ・設計という職場の雰囲気を味わうことができる。
- ・設計の仕事をやりたいと思って入学しているが、途中で施工の仕事に変わる学生がいる。その場合、実習により早い段階で施工へと軌道修正できる。
- ・企業とのミスマッチ解消の機会となっている。

【企業・団体側】

- ・人材不足の中、就職へつなげる機会となる(人材確保のため)。
- ・実習を行うことにより、地元企業に目を向けさせる機会となる。
- ・採用時のマッチングを図るための学生の態度・能力を見極めることができる。

② 企業内実習のあり方

【適切な実習期間の設定】

- ・授業や資格試験対策などで、長期に実習を行うことは課題がある。
- ・現在のカリキュラムを大きく変えず、夏季休業日を短縮して実習を実施すると課題は解消できる。
- ・実習により、単位取得できることから、学生も納得する。

【企業内実習の内容】

- ・設計は発注者から思いを聴き取る能力が必要であり、そのような場面に立ち会えるような実習が好ましい。
- ・現在は設計と施工が一体化してきているため、様々な場面に出会えるような実習が望ましい。学生の今後の設計、施工を選択する参考にもなるために必要である。

③ 企業内実習に向けて

【実習企業の調整】

- ・ 設計事務所協会が仲介をして、企業と学生の調整を図る。
- ・ 一度、実習を受入れてくれれば、その後も要請があれば配慮してくれる。
- ・ 毎年継続するのであれば、企業も受け入れる体制ができる。

【実習時期等の検討】

- ・ 学校としては、1年生の夏季休業日前後が望ましいため、その時期に受入企業があるか検討を進める。
- ・ 最低1週間とし、可能な範囲で長期化する方向で検討する。
- ・ 設計実習実施プログラムのようなものを作ることを検討する。